

1



\*0011116000\*

0011116-000

特255-238

現実外交英国の魂胆

稲葉虎雄・著

近代小説社

昭和13

ABJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

日本文化研究会員

特255

238

稲葉虎雄著

# 現実外交の魂胆

第三國の援蔣政策の真相

P.B

版

日本文化研究会員

特255

238

尔虎雄著

# 現實の外交 英國の神膽

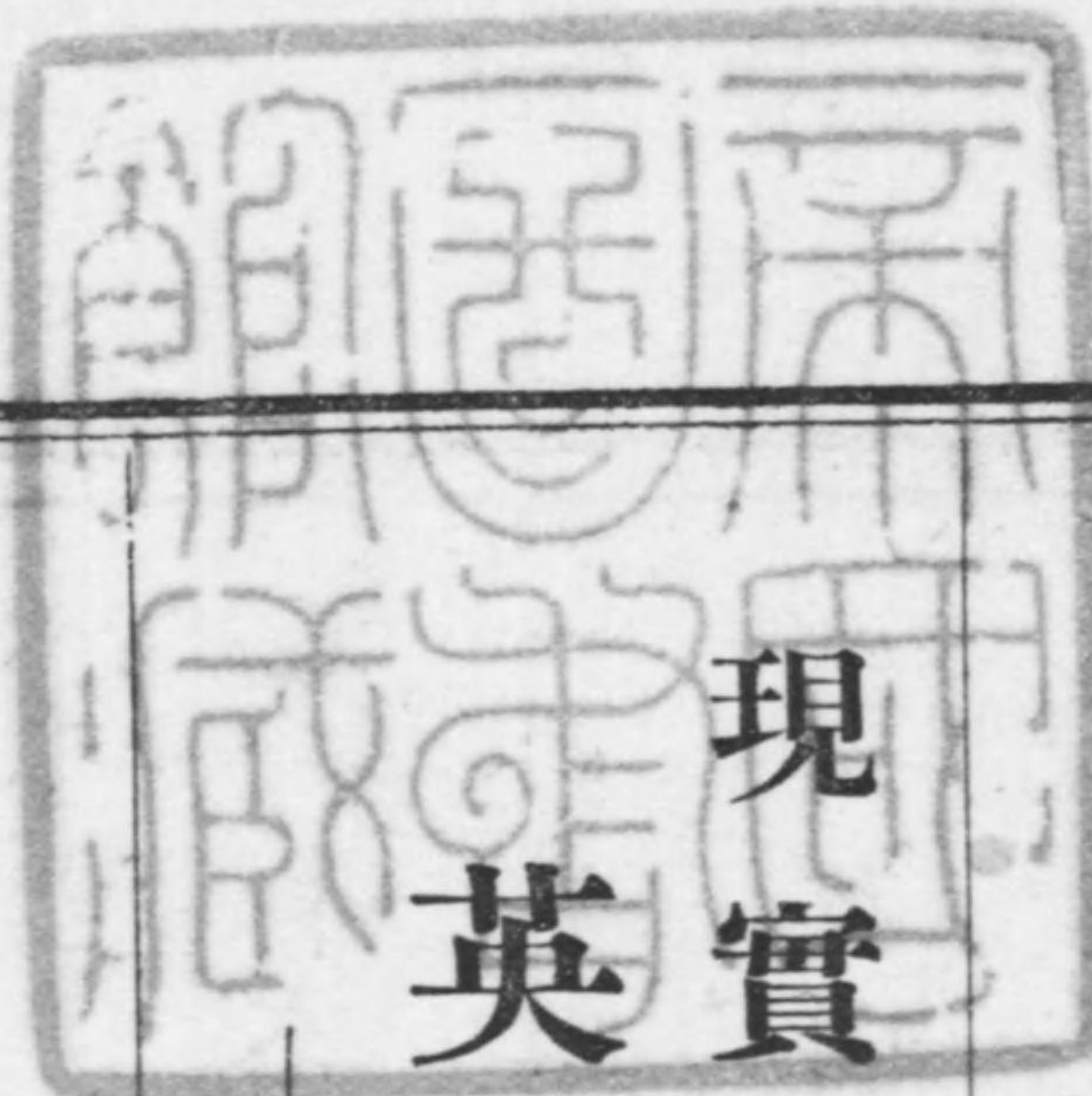
第三國の援蔣政策の真相

定價十圓

P.B  
版

30  
20

442



日本文化研究會員

稻葉虎雄 著

現實外交

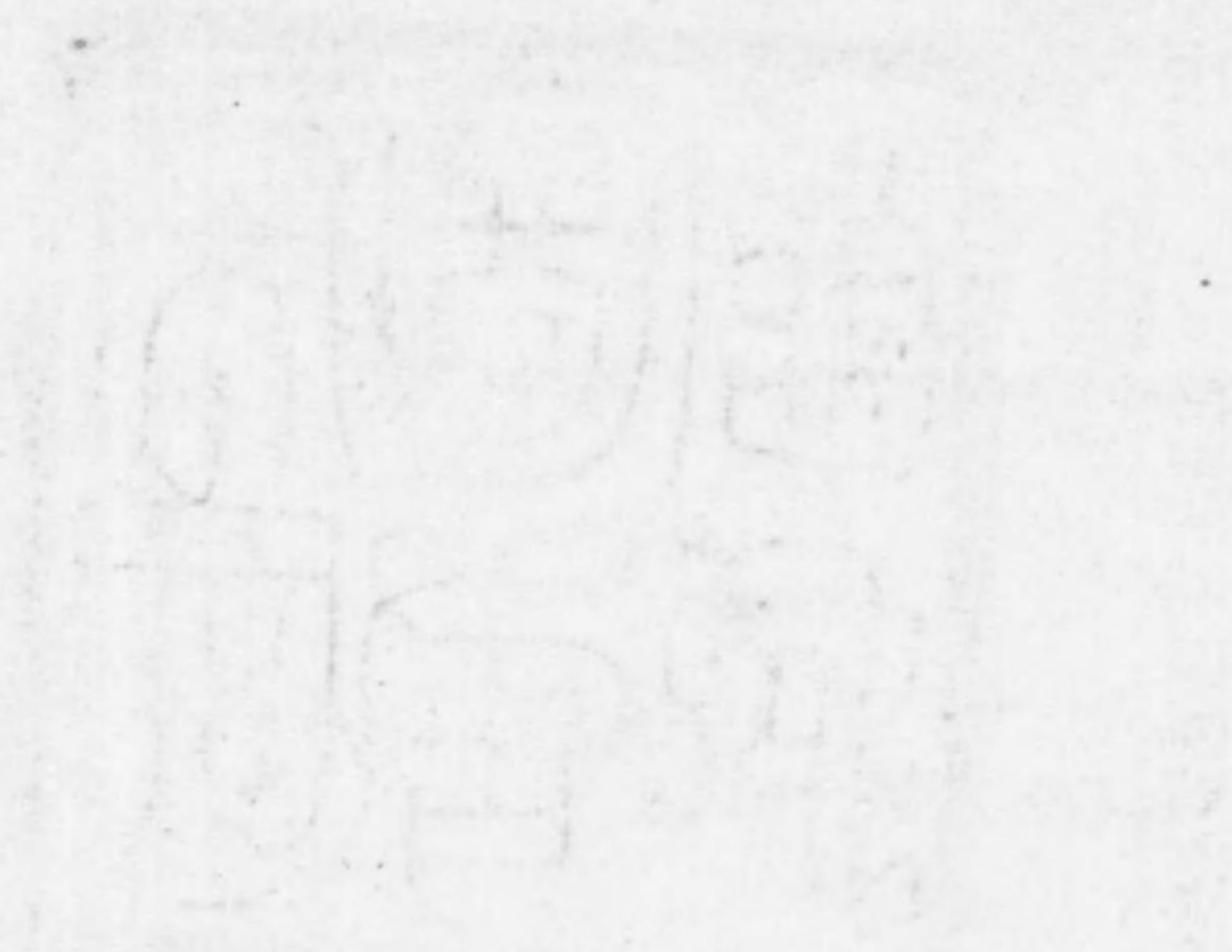
英國の魂膽

— 第三國の援蔣政策の真相 —

近代小説社



特 255  
238



## 目次

- 一、日本を妨げる英國の言動……………五
- 二、英國は斯くして支那を喰ふ……………二三
- 三、英國の野心斯くの如し……………一六
- 四、極東の戦火どこまで延びる……………三〇

### 一、日本を妨げる英國の言動

街頭の喧嘩に、兎角彌次馬が群がるのと同様、日支の紛争にも、世界中の彌次馬が、向ふ鉢巻で騒ぎ廻るのは面白い！ より煩い！！

國際聯盟の二十三ヶ國委員會を初めとし今や世界列國は國府側の虚構の宣傳に躍らされて、日本の眞意を曲解するもの多きに鑑み我が外務當局に於ては昨年十月情報部長談を以つて、これらの虚報やデマを掃滅すると共に日本の對支方針が領土の侵害にあらずして協力提携を求むるものであり、ひいてはこれによつて支那に發展と建設の新時代をもたらし、日支兩國のみならず全世界の繁榮と平和とを招来せんと企圖するものなるゆゑを強調し、更に日本は現下の情勢において何等仲裁の要を認めず、斷乎既定の方針に邁進するの決意を明確に表示した。

今や、日支事變が、單に日本と支那との問題でなく、むしろ支那を舞臺とする日・英・ソ三國の國際的交渉に重要性を持つて居ることはいよ／＼ますます／＼明瞭の事實となつた。特に中南支へかけて莫大な投資を持ち、國民政府の財政的擁護者であり、世界外交の先輩を以つて自他

共に任ず英國の動きについては、われ／＼をして滿洲事變當事の「苦々しき追憶」をあらたにさせるものがある。例のヒューゲツセン大使の遭難抗議をはじめ、英國の輿論硬化は見え透いて居る。南京空爆に對する異議もあつたがまだ我慢も出来たらうが、粵漢鐵道の爆破敢行がみごと急所に命中したのであらう。故障申込れだけでは済まされまい、香港を孤立状態に置かれたことは腦天に一撃を喰つたに等しいからである。最近ではジュネーヴにおける對日經濟ポイコツト論等々背後には英國の労働黨の強硬な主張に依るといつてゐる。キリスト教徒的センチメンタリズムといふべし。

この五日にはニュース・クロニクル紙(自由黨系)主催の反日大會に例の「苦々しき追憶」の主リットン卿其の他の反日派の連中が出席するばかりでなくカンタベリー大僧正までがその司會方を輕卒に受諾したとか。

カンタベリー大僧正の出席承諾に關して、ロンドンからの電報は支那側の反日デマに依るといつて居るが、英國の立場からいへば支那の實相については知りすぎるほど知つてゐるのだ、支那のデマが英國を動かすのでなくて、英國が支那の虚報を驅使して居るのである。カンタベ

レイ大僧正の問題等は、明らかに政府との諒解にもとづくものと見なくてはならず老く、わいなる英國外交の一大デモンストレーションと見なすべきである。

たとひ、カンタベリー大僧正が、反日大會の司會者になつたところで、日本の支那に對する行動に變りはない、それをどうでも動かさうとすれば、國際的にも、國內的にも更に大きな反動があるのみだ。極東の形勢は、すでに歴史的なる生死の關頭に來てゐる。支那はいよ／＼英國に縋つて、その全面的敗退を免れようとしてゐるが、當の英國に果して、百年悔まざる日本への認識があるか、どうか、成算があるならやつて見るもいゝ。

國際聯盟が紛擾處理にあつて、机上の空論とセンチメンタルな感情論から、もの事を輕卒に處斷するは今にはじまつたことでないにしても、聯盟が世界平和の殿堂として正義公道に基き、國際調整を圖るの崇高な使命を自覺してゐるなら、如何に些細な問題といへども事のよつて來る根本原因を究明し、先づその素因を爰除すべき適正の措置を講ずる努力を拂はねばならぬ。聯盟今日の威信失墜と凋落を招いた原因一つにして足らないのであるが輕率と感情的行動に禍ひされてゐることも見逃し得まい。

支那事變を審議すべく昨年九月に開かれた廿三ヶ國諮問委員會は、支那代表顧維鈞の提議を容れて、わが空軍の爆撃問題を第一に取り上げ日本空軍の支那都市爆撃は全世界の恐怖であるから委員會は日本の行動を嚴肅に非難するとの決議案を採擇しこれを聯盟總會に報告することとなつた。諮問委員會は如何なる根據に基いて斯る決議をなしたのであるか。荒誕無稽の誣説を以て日本を誹謗し、列國の反感を咬りたてて、あはよくばその干渉を求めんとするに汲々たる顧維鈞の一方的陳述と、支那側から放送される虚報そのまゝのルーター電報一本の報道だけを基礎とする一片の討議により即時この種重大事項に對する是非の斷案を下したのではないか。その輕率にして感情的なる斯くても國際平和保持の公的機關たるものゝ態度として峽く所なしとするのである。

わが空軍の支那都市に對する爆撃は、その都市軍事當局から公表するが如く、たゞ一回といへども軍事施設を有せざる無防備の地帯に加へられたことはない。しかも爆撃の目標たる砲臺、兵舎、兵器廠、軍事輸送機關、飛行場等すべて現實なる作戰用兵の根據地にして苟くも軍事關係を一步も出でざることとは過古一ヶ年に及ぶ戰蹟が嚴乎これを立證してゐるのである。

昨年九月の南京空爆に際して豫じめ非戦闘員の安全地帯避難を通告したのも、軍事施設の徹底的爆撃に當つて災害の無辜の市民に及ばんことを顧念した好意に外ならない。これを歐洲大戰中、軍事施設と非戦闘員とを問はず一舉に空爆した事實と對照すれば天地霄壤の差があるといふべきであらう。

諮問委員會においては英國代表クランボーン外務次官が激越にわが國を糺彈すれば、佛國外相デルボス氏これを左袒し、リトブイノフ氏の相槌によつて決議案の採擇となつたことは三國の立場と關係よりして極めて當然とするところであるが、同委員會が一方的論據によつて斯かる偏頗な斷案を下する所からすれば事變の全局に對する措置の如きも亦推測に難からざる所である。聯盟が過古における幾多の失敗にいまなほ自覺するところなく、更に過誤を重ねるにおいては、その没落に拍車をかけるばかりである。しかもその結果は聯盟を牛耳る國家に對する世界の反感増大し、平和破壊の責任はこれ等指導的國家の負ふべき所となり、國際政局の前途に及ぼすべき影響を思へば、われ等は聯盟現下の輕率なる行動に對して、まことに慄慄の情を禁じ得ないものがある。

同委員會は同二十九日更に小委員會を設けて極東問題の一般情勢を審議報告せしめることに決したる由であり、右小委員會とは別に、英國筋では米國をも含む極東關係國を以て調停委員會を設置するの意見があるといふ情報もある。

更に廿九日には南京空爆に關する英・米・佛三國の抗議に對し、政府は南京が堅固に防禦せられたる作戦中樞地たる事實を指摘して、爆撃されるも問題のない都市であることを明示した回答を發した。回答は事理極めて明白であつて疑問を殘すの餘地はないのであるが、それにも拘らず關係國のうちには尙ほ不滿のものもあると傳へられる。

これらの情況を見て吾等の遺憾とするところは、聯盟にしても英・米・佛にしても、日支間の紛争について今尙ほ正確なる認識を持たざるかの如く、事實問題の闡明と資料の蒐集とを以て、机上の觀念論と感情的な人道論のみで動いてゐることである。

斯く安價な人道主義を振り廻して騒ぎ立てる國々もあるが、武器を持たずして戦争をやれといふやうなもので一顧の價値なきはいふまでもない。平和論の原則に異議なしとするもノルカソルカの瀬戸際に立つ、當時國に對しては意味をなさぬ。對岸から火事を眺めてゐるものゝ心

理と渦中にあるものとは切實の程度か違ふのだ。阿片戦争の因由などに顧みたら英國等は人道主義などをふり廻せた筋合のものではあるまい、重商主義の袖の下に侵略の利刃を隠して支那を植民地化したのはアングロ・サクソンであらう、列國の對支文化施設と稱するものが、結果に於て悉く侵略のパリケードであることは申すまでもない。モリスデゴブラのインド旅行記の一節に、「歐洲大戦の時一日僅か半ルビー給料でベルギー戦線の土に埋め草となつて全滅したインド、ラホール聯隊の運命を想ひ出す」と云つてゐるが、かうした非人道的行爲は何とするか。

日本は生きるために如何なる難局と雖も踏み越へねばならぬ。否それ以外にはあり得ないのである。如何なる艱難と雖も、必ずやこれを打破して行くためには自ら工夫し、建設して行かねばならぬ。

支那事變は日本の國是のための戦ひであつて領土的侵略を目するでない。わが外務當局がしばしば言明された如く、極東の安定、國際正義の實現、こゝにすべて事變の指導原理に一貫したプリンシプルがあるのである。外務當局者は宜しく世界に向つて、この點に關して毫末の疑

惑ながらしむるやう最善の力を努すべきでめる。豈獨り世界に向つてのみでない。國內に向つても必要である。

## 二、英國は斯くして支那を喰ふ

事變直前の支那は、その全面に亘つて歴史的轉換期にゐた。南京政府つまり國民事件に依つて民族的英雄となつた蔣介石を中心とする全國統一の動機と、排外的ナショナリズムの精神とが結合し、非常な迫力を以て日本の上へのしかゝつて來た。かくて支那は世界的意義を以つて進出たのであるが、特に日本にとっては最早興味の對象でなく、實に我が國運の消長を左右する存在となつたのである。斯る統一的動機と排外的ナショナリズムの結合は生じて、抗日・反日と進展し、日本に迫つて來るに至り、こゝにはじめて支那が日本の生命線として極めて深刻に表現されたのである。思へば國家統一的の動機に氣負ふ支那抗日精神の激化、これこそ日本にとつて見れば實に戦争ならぬ戦争を挑みかけられたのであり、また大陸發展途上に現れた一大障害となつたのである。

殊に支那は歐米依存の外交政策をとり、虚偽とデマのすぐ尻の害れる反日宣傳であつたが馬鹿らしいほどの傳播力を發揮したのはあらゆる文化機關を動員して下の方から火をつけてゐるが爲だつた。その結果は歐米の列國が、知らず識らず支那側の尻馬に乗るやうになり、互に協同して日本の進出を牽制するといふ目論みを以つて、著々對日包圍の陣形を結成して行く實情であつた。

ソ聯邦は、例の西安事件を契機として、國民黨、共產黨兩派の妥協が成立するとなるや、大手を振つて支那との接近を策する様になつた。結局支那、英國、ソ聯邦のタイアップを結成し

一聯の對日共同陣を張つたのである。しかし實事、日本の大陸政策に眞ともに立ちはだかつて、日本牽制の第一陣を承つて居たのは何と云つても英國だつた。英支の合作は、例のリースロス氏が支那の幣制改革に關係してからの繼續事業だつたが、最近支那の經濟建設熱が澎湃として起るやうになつてからは、それと策應して猛烈になつたのである。その立役者としては、英本國では例のリースロス氏採配を振つて居り、出先にはカークパトリックを始め、駐支大使ヒューゲツセン、香港總督カルデコット



が居て、それに總稅務司のメイズ氏は、内輪からの畫策に抜け目がなかつた。又支那側は宋子文、孫科、孔祥熙等歐米派の巨頭が相寄つて、英支合作の聲援に當いて居るから、正に至れり盡せりといつてよかつた、かくて兩國の合作は、國防方面では香港及び海南島の防備から中北支那方面の防備にまで及んだ。經濟方面では粵漢鐵道、滬角鐵道の着手を見た外、廣梅、南京——江西鐵道、福建——江西鐵道、湖南のアンチモニー開發、兩廣の資源開發等が噂に上つて居り、著々進行中だつた由。兎に角昨今の英國が、支那の經濟建設に大きな力になつてゐることについては疑問の全地がない。財政合作に於いても幣制改革、クレジット設定等支那の財政立て直しに貢げんするところ極めて大で、それには英國系猶太人のサツスン財閥の活動を見逃すことが出来ない。更に財政部長の孔祥熙はロンドンで英國當局との間に巨額の借款交渉をしてゐたが此の借款商議は、支那中央銀行の準備資金を集めることが目あてだつたと傳へられる。

かういふ英支合作が、單に支那援助の純眞な動機から出たものなら、外部からとやかくいふ筋合ではないが、しかし英國側の肚裡は、表面支那に好意を寄せると見せかけて、中南支方面

に於ける商權その他の權益を獨占して支那を英國の半植民地にしてしまふ。また支那と共同して日本の大陸政策に當るといふ一石二鳥式の獲物を狙つて居るのである。そこに英國が自ら進んで今次事變の渦中に飛び込み、對日戰の主役を買つて出る氣持が窺はれるのである。

この時に際し、日本として卒直に英國にきゝたいことは、英國は一體、支那の赤化に同意するのか、しないのかといふ問題である。例の西安事件以來、南京政府が、急速に容共政策をとつて來たことは、英國の背後策動と共に、今次事變の有力な原因の一であるが、日本としては、滿洲國に接壤する北支の赤化に對しては、斷じてこれを許さぬ決心と方策を持つてゐる、しかしながら、内蒙において、日本の實力でせきとめられた赤化の流れが途を變じて南下したとする、それが東へ向けば長江を中心とする英國の帝國主義的基礎をゆすぶるし、西へ延びれば、そのまゝ印度の脅威だ、東洋の寶庫である印度の生命線を確保することは、古來、英國の極東政策の根幹であつて、それにもつとも忠實に協力したものは若き日本であつた。英國は、世界に有する膨大な植民地と市場からいへば、決して致命的なものでない對支貿易や、國民政府の財政を固守するのあまり、この大いなる極東の危機に目をとちようとするのであるか。

## 三、英國の野心斯くの如し

英帝國は本國と五個の自治領（カナダ・濠洲・南阿聯邦・愛蘭・ニュージールランド）と、印度と稱する準自治領並に王領植民地から成つてゐるが、自治領はウインザー王朝を載いてゐると云ふつながりの外に名目上絶體の獨立國であつて、本國と對等の地位に立つてゐる。それかと云つて英帝國の國防と外交とは矢張りロンドン政府に依頼すると云ふ融通無碍の形態を以て外部に臨んでゐるのであるから、英帝國とは内部は數箇の獨立國であつて、外に對しては一つのブロックを形成してゐると見られぬこともない。誠に以て不思議を極めた國である。従つて其の政府の形態も、外交も、延いては國防の方針も複雑多岐、千變萬化、容易に端睨す可らざる形を以て現れるのは當然である。

けれども、英帝國の國は數百年來一貫して微動だもしない。商工業で生活を立て、原料品と食料とを海外に仰いで、石炭と製造品を外國に賣つけ、之が爲めに多數の商船を維持し、浮動せざる通貨を有し植民地を世界到る處に建て、これを護るに世界最強の海軍を以てする。こ

の海軍と植民地を失ふ時は英帝國に太陽の没する時である。故に公海の自由は英國繁榮の第一の要素であり、海軍は英國生存の核心的勢力であること云ふ迄もない。

かやうに英國は歐洲にありながら他の大陸に依存する國である。然し國防の上からは歐洲大陸の形勢に一日たりとも無關心であり得ないことは、英佛海峡が僅に廿四哩の幅に過ぎないことから生ずる當然の結果である。大陸諸國の勢力均衡を維持して平和を確保することは英國の傳統的政策であり、爲めに大陸の低地（オランダ、ベルギー）から英佛海峡の對岸が強力な陸軍國の手に歸することは國防上の一大脅威である。夫れ故にこそナポレオンの覇業に對しては國運を賭して闘ひ、ドイツ勢力の優越に向つては四ヶ年半の苦闘を辭せなかつた理由も諒解せられる。こゝに歐洲全般の政局に終始イギリスの關心が集中せられる理由が伏在するのであつてジークフリードの云つた如く「英國を歐洲に合一させることは夢であり、歐洲と分離させることはユートピアである」との言が首肯されるのである。

觀じ來れば、イギリス立國の中樞はドミニオン政策と通商政策であり、國防の上から云へば大陸の勢力均衡と海軍の優越勢力である。従つて現下の難局は、自由通商と特惠關稅との矛盾

を如何に調和するか、大陸政策の遂行に何處まで自治領を引摺り得るかに存するものと云ふことが出来る。本年五月十四日から一ヶ月に亘つて開かれた英帝國會議が以上の二問題に對して如何なる結論を與へたかは、英帝國の動向を決する鍵であると云ふも過言ではない。

英帝國會議の前身は一八八七年にロンドンで開かれた植民地會議である。ヴィクトリア女皇の即位五十年式典に集つた自治植民地の代表者はロード・ソールスベリーの司會の下に會合して最初の討議に参加した。その後幾度かの試練を経て一九三五年、ジョージ五世の即位廿五年式の機會には、自治領は既に成長した獨立國家の代表者をロンドンに送つたのである。然し植民地會議が英帝國會議と呼ばれるに至つたのは一九一一年以來のことであり、又一九二六年の會議に於て自治領の憲法上の地位が明確に決定せられた。即ち自治領は本國と共に英帝國内に於ける自治體として、同等の立場にあり、決して内政、外政に於て從屬的地位にあらず、只皇室に對する共通の忠順によつて自由に結合せる英帝國組合國家なりと認められたのである。

今回新帝の戴冠式を機會として召集された英帝國議會は五月十四日からセント・ジエームス宮殿に於て開かれた。會議の題目は(第一)に外交及國防であり、(第二)に英帝國の機構で

あり、(第三)に本國と自治領との通商、海運、航空等の經濟問題と定めてあるのに見ても、現在英帝國の當面する外交、國防、經濟の全面的重要政策に亘つて検討の行はれることは略明白であると云はねばならぬ。

外交の部門に於ては、歐洲問題に決定的の發言權を得る爲めに國防充實に邁進する英本國と、なるべく歐洲の紛争渦中に飛び込み度くないと考へてゐる自治領との見解の差違を何處まで、どうして調和するか、それが延いて國防充實の政策と、其の經費の分擔問題に大影響を及ぼすこととなる。

通商海運の問題に至つては、兩者の利害が一層厄介な衝突を惹起す虞は充分である。原料を輸入し、製造品を賣込むことを本位として、先進工業國の特權を極度に主張するイギリス本國が、次第に成長しつゝある自治領を何時まで植民地扱ひに爲しうるかの問題なのである。カナダ、印度等が眞先きにこれに反對する理由は、自己の經濟生活が英本國の犠牲となるには自ら限度があると主張するのであつて、従つて英本國が如何なる對償を支拂ふ用意ありやを計量して徐ろに其の態度を決せんとするのである。

孰れにしても、今年の英國議會は從來數回の會議に比べて、極めて重大な使命を課せられて居り、本國と自治領との妥協の成否は、英帝國の動向に可なり本質的な變更を與へるものと見て誤らないであらう。

一九三六年の英帝國は恐らく、一九一八年の春期、ドイツ軍が西部戦線の脆弱點に兵力を集中して、一舉にしてアミアンの前線を突破し、將に英佛海峡に殺到せんとした時以來、未だかつて見ない暗澹たる空氣に包まれた年であつた。夫れは云ふ迄もなくエドワード八世とポール・ドゥイン内閣との憲法上の争が、全國民の心臓を痛ましめた事件であるけれども、同時にイギリスが集團的安全保障と稱する大戦後の外交方策から、自力主義に立戻ることを決意して空前の大軍擴を斷行せざるを得ない環境に自己を發見したことであつた。

事態は最早や國際聯盟の機構を以てしては救はれない。自ら武裝する外に途無しと悟つたジョンブルは増税と赤字公債とを以て大海軍と世界最強の空軍の建設に全力を擧げる決心をした。云ふまでもなく、この事實は國策の變更では無いにしても、英國外交技術の一大轉換である。

世界大戦四ヶ年半の試練を経て戦争直後のイギリスはしみく、休養の必要を痛感した。十年間戦争をさける決意をしたことも、當時の事態から見て尤と頷かれる處である。戦争に慫へずして平和を維持する爲めにデューネーヴの國際聯盟に全幅の支持を與へ、之によつて歐洲大陸の勢力均衡を保ち、自治領を一人前の獨立國として其内に包容し、この機關を通じて自由通商の原則を維持せんとしたのである。けれども周圍の情勢は必ずしもイギリスの希望のやうに動かなかつた。他國の動向は却つて豫期に反する方向にのみ趨つたのであるから、ロイド・ジョージよりイーデンに至る英國の外交は可なりの迂餘曲折を辿らざるを得なかつた。

依つて、大戦後のイギリスの外交が狐疑逡巡して透徹を缺くとは、世の評論家の指摘したところであり、英國内でも在野黨の批評が集中された點である。成程、どの外務大臣にも失敗と翻語は付き物であるが、然しその根柢は遠くヴェルサイユ條約に發足するものであつた。アメリカの上院が平和條約の批准に反對して國際聯盟に参加を肯んじなかつた處に病源は潜んでゐたのである。

大戦後の平和會議が當面した最大の件案はフランスの國防安全の問題であつたが、それはイ

ギリスに取つても歐洲大陸の均衡にふれる重大事件であつた。將來のフランスの安全を策する途は

一、ライン左岸をフランスに與へるか。

二、英米がフランスの安全を保證するか。

三、ドイツを小なる聯邦に内離させるか。

の三つの方法しか考へられなかつた。そうしてヴェルサイユ會議は第二の方法を採用したのであつたが、條約批准の大結に至つてアメリカの落伍の爲めに實行不可能に終つたのである。

そこで殘された問題は、如何にして毀れた釜を修繕すべきかに在つた。フランス同盟政策に立歸つて國の安全を求めんとし、イギリスはドイツを説得して集團的安全保障の方策に依らんとした。ブリアン・ストレーゼマン・チエムバレンのトリオが歐洲の外交を指導した間はイギリスの考案は成行するかに見えたが、ストレーガマン倒れ、ブリアン去つて後の大陸は、絶望的なドイツ民衆をしてヒットラーの擡頭に希望を繋がせるに至つた。ヒットラー執權以後の混沌として歸趨に迷ひ、戰雲低迷して、軍擴の熱度のみ上昇するに至つたことは吾等が今眼前に

見る情景である。

やがて、國際聯盟は威力を失ひ、歐洲の二大勢力は益々對抗の姿勢をとつた。ソ聯邦とフランスの提携に對立してベルリン・ローマ樞軸の完成を告げると噂せられる。權衡の崩れむとするこの情勢に對して英國が有力な發言權を握らうと欲するならば、之に伴ふ武力を備へなければならぬ。ホアー・イーデンの智略を以てしても、背後に控へる實力なくしては何事をも爲すことは出來ない。況んや大陸諸國が一九三三年以來、國の破産を覺悟して軍備充實に邁進しつゝある光景は、悠々たる英國民をして流石に戒心の眼を見張らさせるに充分な刺戟であつた。

けれども、廣大無邊な版圖を擁し乍ら、これを武力で護ることは容易ならぬ大問題である。富強英國の大を以てしても、行く行くは自治領の援助を俟たなければ世界第一の武力を維持することは思ひも寄らぬ。自治領をして本國を支持せしめ外交の上にも、國防の上にも一心同體の機能を發揮させなければならぬ。それが本國の政策轉換に伴ふ英帝國會議の重要性であつたのである。

英國政府の時局に對する認識は、昨年五月の會議に於て、ボールドウィンとイーデンから詳

細に自治領政治家に説明した。之に對して居列ぶ面々は事情は諒とするが、さてどの程度に本國で本國を支援するかは明白に表示しなかつたと傳へられる。濠洲は既に久しく東洋艦隊の維持費として本國に献金を續けて居り濠洲艦隊としても、シドニー外二隻の新式巡洋艦を保有して居る今日である。カナダの如きは國柄として軍備の必要は痛感してゐないに拘らず、昨年來本國の意嚮を汲んで不相應に膨大な國防充實費を計上することに決定してゐる。更にこの上の軍事費分擔は國の輿論がオ、イ、ソ、イと嚙下するかどうか自信が持てない。さうなればカナダはアメリカ合衆國に依頼するのが近道であり、濠洲としては一應太平洋の不侵略條約を以て、國防安泰の鎮靜劑にしたいと考へ始めたのも無理とは云へない。さてこそ帝國會議初頭の五月十四日に濠洲ライオンズ首相から太平洋不可侵略條約が提唱された所以である。

眼前に現れた英國の國防不安は、北海に於てドイツに備へ、地中海に於てイタリアに對抗し、印度洋以東に於ては日本海軍を考慮して計畫を樹てなければならぬといふ點に在る。之が爲めに昨年春期の議會に提出された國防充實計畫は陸海空の三軍に亘る全面的軍擴案であつて、向ふ五ヶ年間に國防費總額十五億磅（時價二百五十五億圓）を支出する計算である。その

賄代としては、所得税の引上げ、國防税の新設、そして四億磅の赤字公債の發行によつて辻褄を合せようとする腹である。

自治領の政治家は、これを風馬牛と視る譯ではないが、それにしても、本國が歐洲問題に深入りして、戰爭に捲込まれる如き場合に果して國民がついて行くかどうかは疑問だから、此際「パリ、ロンドン毒解し」の態形に偏するやうな外交は再考して貰ひ度いと、イーデンを拘束すると迄は行かずとも、慎重の態度を要求するのは立場から見ても無理はない。それと同時に對米工作を怠つてはならぬとの注意も出たことであらう。

だが、國防の不安は現實の問題であつて、濠洲、加奈陀の如きは本國艦隊の増援か、アメリカの庇護によらなければ、將來の防衛に見透しが着かないとの疑懼を抱いて居る。よつてシンガポール軍港に印度洋艦隊の相當な勢力を置くことは固より希ふところである。尤もイギリスの建艦政策は未だ全貌を示しては居ないが、差當り主力艦の代艦を加算して、今後五ヶ年に主力艦を二十五隻とし（十隻増）、空軍勢力を三倍にすると傳へられてゐる位だから、場合に依つては舊式主力艦の十隻位を濠洲からシンガポール附近に常置しようとの腹案もあるかも知れな

い。それは自治領の熱望に副ふ所以であるが、更に英米の提携を緊密にすることが、最も効果的であるとの觀察も有力に行はれてゐること周知の通りである。ロイド・ジョージもロシアン侯も、スチードも數年來この政策の主張者であつて、誰一人これに反對する者を見ない程「アメリカ第一主義」に左袒してゐるのである。

アメリカを引付ける政策は大戦以來のイギリス外交の中樞であつて、マクドナルドも、ポールドウィンも、萬遍なく注意を拂つて來た。云はゞ英國の廿年計畫と云つても差支ない程遠大なものである。だが米國の大勢は、昨年の中立法論議に現れた如く、アメリカに關係のない問題の爲めに戦争に捲添へを喰ひ度くなつたといふ考へ方に支配されてゐる。だからと云つて、世界に何が起らうと、我不關焉で済まさうとの決心をしてゐる譯でもない。外交協會の第一人者ビュエルの云ふ如く、米國人が劍を執る場合は、(一)海洋自由の原則を維持し、(二)デモクラシーと自由とを擁護し、(三)自己防衛の必要が迫つた時であると觀察することは誤りであるまい。處が自己防衛と云ふ言葉が甚だ曖昧に残されてゐる。ビュエルは英帝國とフランスとの安全は米國國防の第一線であると稱し、支那の保全も亦之に亞ぐ重大性をもつと述べてゐる。

るのであるから、歐洲と極東の紛争が左様な點にふれる場合にはヤンキーの協力を期待しうると英國人は睨んでゐるであらう。さうなると、英米の接近に自治領と稱する仲介人の存在が極めて必要でもあり便宜ともなつて來るのである。

最後に残された通商、海運の問題についても英帝國會議の空氣は豫期した程芳ばしく無い。ヴィクトリア王朝時代の繁榮を享けて、デョゼフ・チエムバレンは大帝國の一大ブロックを結成し、本國の製品と自治領の原料品とを交易する夢想を抱いてゐたが、かうした理想が今となつてはうたかたの夢に均しいとは、時代の推移で何とも致し方はない。けれども世界戦後の經濟不況に當面しては、十九世紀以來の自由貿易主義では所詮イギリスは立つ瀬の無いことが明白になつた。殊に一九二九年の恐怖の波は北海の嵐の如く大不利顛を襲つて、さしもの金融王國が金本位さへ維持できぬ情勢に陥つたのである。滿洲事變と時を同じうして英蘭銀行は遂に兌換を停止した。

何故に磅の王位が顛落したかは、恐慌直前に發表されたマグミラン報告書とメイ報告書とに詳細を盡してゐるから、こゝに詳述すべき限りでないが、一九一三年に比較して、英國の輸出

が三割以上も減退し、失業救済費に二十億圓以上の経費を要し、貿易外の受取勘定を加へても一ヶ年二億磅の支拂超過を示す状態であつて見ればロンドンの財界に秋風の立つのは必然の勢である。

この頽勢を挽回する爲に、英國人は思切つて傳統の衣を脱いだ。自由貿易政策から保護主義に轉向して、一面には外國品に對する課税を平均一割を引上げ、他方には自治領との連繫を緊密にして特惠主義を一段と濃厚にする政策をとつた。それが一九三二年の關稅改正とオタワ協定となつて現れたのである。オタワ協定の結果イギリス本國から自治領への輸出は四十四%より四十九%に上り、外地から本國への商賣は二十九%より四十%以上に増加した。然しこの協定の結果に對して母國に對する不滿もあり、本國內でも苦情の起るやうな事情が発生した。英國の農民は外地の農産品の競争に悩み、外地の自己の工業を保護する爲にも、海外との市場關係からもオタワ協定の存続を願はないものを生じた。その内にもカナダは北米合衆國との互惠に重きを置き、印度は自國産業の發達に關心をもつ結果、反對の意嚮が強烈であることを、英國政府としても萬更無視する譯に行かないのである。

殊に又、特惠主義で一貫すれば本國の輸出は外國市場で閉出しを喰ふ危険も多くなる。工業家と船舶業者は苦情を持たむ。そのみならず、イギリスの經濟的國民主義に刺戟されて、世界到る處に關稅障壁が高く築かれて行く。凡てこれ等は世界經濟の恢復を妨げ、延いて英帝國の繁榮を阻害する原因たることは云ふまでも無いのである。それが單に經濟的梗塞に止る限り以上問題の波及するところは相當に廣くして且深刻である。茲に英帝國が進退兩難の岐路に立つ理由が存在すると思はれる。

英帝國議會は六月十五日を以て一應の閉幕となり。通商航海に關する具體的の論議は帝國經濟委員會、海運委員會等の専門家の手に委せて、自治領政治家はそれ〴〵家路へ急ぐことになつた。さて、英帝國會議の効果如何、イギリス帝國主義の限界如何との問題に對して、我等は依然として英國外交の複本位制に想到せざるを得ない。

ジョン・ブルは英帝國特惠主義の城塞に立籠りつゝ、徐ろに自由通商の舊道に立戻る機會を窺つてゐる。自力本位の軍備を用意しつゝ集團的安全保證制の殘壘を維持せんとするのが差當



つての胸算用であるだらう。所詮イギリスの帝國主義は侵略的である必要を見ない従つて經濟的國民主義が破綻に瀕し、列強の軍備擴張が行詰つたと見れば、英國は何時でも城壁を出て再び前日のスローガンに立歸り、關稅障壁の撤廢、軍備制限實行の旗手となる覺悟をきめてゐるのではないか。たゞ外界の情勢が果してイギリスの目指す集團的行動に立戻ることを許すや否や、乃至は自由貿易の大旗が再び國際通商の陣營に翻る時が来るかどうか、それは今回の現状を見ては大なる疑問である。従つて、この混亂の波を搔きわけて行く大英帝國が逆櫓の戦法を踏襲することは如何にもイギリス人らしい行き方であると觀する外はないのである。

#### 四、極東の戦火どこまで延びる

廣田外相の議會演説の一節に「洋の東西に類似の地理的關係を有する日英兩國が、理解を以て協力することは世界平和の爲に益するところ大なり、といふ外交理論は成立する。況して二十年の盟交を續けた記憶は、極めて當然に、あかの他人と異なる感情を以て結ぶであらう、といふ因縁論は有力になり立つ筈だ。」

しかるに、シンガポール築城は、同盟解消の翌年發表されて右の感情を冷却した。その後の關係も、日本から末練を繋ぐほどの温かい姿勢は見えなかつた。しかし誠意ある日本は、「他の國よりは」といふ感情を胸奥の一隅に常に残して來た。が、歸するところは利害の問題となるのが外交政策の原理であり、この點、英國は最も明確に動く國である。而して今日唯今、日英感情の悪化は、舊友の情を外にしての外交上の現はれに他なるまひ。かくの如く現實的であるとともに進取的であり、實利的であると共に革進的であるといふ、この國是一般から生れ出したものであることは勿論である。而してこれを擔當する外交家に硬軟各派があり、時と處に應じて和戦兩様の備へをす。誠に老かいと云はるか、羨しき限りでもある。

我々は日本の周圍を見なければならぬ。日本は日本がおかれてゐる國際的諸關係について深甚の注意を拂はねばならぬ。

事變は何時まで續くか？ 日本の長期抗戰、同時にその國力の消耗を喜ぶものは歐米のみである。わけても英國とソ聯邦とはこれを望み、これを待つてゐる。極東二大民族が血みどろな戦ひをつゞけ、相互に傷つけば傷つくほど、衰頹しはじめた歐米は、胸を撫で、觀喜し、手

を叩くであらう。この意味からすれば、かく二大民族の相戦うのは歐米の陥穽である。歐洲は支那に武器、食料をつぎ込み、そして事變を可能な範圍まで長引かせる戰略——實に戦はずして自から勝つの方法をとるのであらう。歐米依存の支那は今やこの陥穽のうちに自らを落しこんでゐる。

皇軍の向ふ處敵なしである、上海に北支に戦線からの報告は一つとして満足をもつて迎へられないものはない。

しかし戦ひはまだはじまつたばかりである戦争はこれからだ。日本は手をゆるめてはならぬ。驕いてはならぬ日本は全力を傾けて眼前に横たはる難關を突破しなければならぬ。戦争はこれからだ！

# 會 員 募 集

◇本社はラヂオや新聞では知り盡せない時事問題を最も正確に批判解説し又、最も興味深い事件、其の他、今日の常識として、必要缺くべからざる問題を順次パンフレットの形式で發行して居ります。

◇會員には毎月平均パンフレットを四種類以上發行毎に御宅までお送り致します。其の他に別に定められた特典があります。申込と同時に規則書御送附します。

◇會員は會費の拂込と同時に會員の権利を得る事が出来ます。會費は左の通りであります。

◇會員中著述、出版等御希望の方はパンフレット文藝社事業部宛に御相談下さい。

◇申込所、東京市京橋區横町一ノ七日本文化研究會。

三ヶ月  
壹圓貳拾錢

六ヶ月  
貳圓四拾錢

一ヶ年  
參圓五拾錢

會費は前納の事 但し送料其の他の費用共

## 現實外交

### 英國の魂膽

定價 十錢

送料 三錢

昭和十三年八月二十日印刷納本  
昭和十三年八月二十三日發行

著者、稻葉虎雄

東京市京橋區横町一ノ七

發行人 武井義男

豊島區西巢鴨一ノ三九三

印刷所 東陽社 印刷所

東京市京橋區横町一ノ七

發行所 近代小説社

電話東京九五五〇番

東京市京橋區横町一ノ七

全配給元 電話東京九五五〇番

兵庫縣加古郡神野驛前

パンフレット文藝社

岩手縣和賀郡横川目驛前

パンフレット文藝社

東北代理店

(東京市京橋區横町一ノ七)

特約

鐵道保養會・鐵道弘濟會・共同配本社・新正堂書店・菊竹金文堂・石井南進堂

……目書賣發社藝文トッレフンパ……

(錢三料送) (錢十册各價定)

一りあに店書名有・店賣驛國全▶

◀いさ下込申御へ社本接直は際のれ切賣

	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25
市木	片山	住吉	武村與志夫著	武村與志夫著	山川	山川	菊池	菊池	伊井東吉郎著	竹居	北浦萬太郎著	南	片山
亮著	透著	七郎著			拓著	拓著	華洲著	華洲著		半二著		介二著	透著
風雲急なりソ満國境	危機ロシヤの肺腑を抉る	出征凱旋入營慰問弔辭の述べ方	英ソ佛の對日策動を衝く	支那を繰る宋美齡の正體	日英戦争か、日ソ戦争か	日ソ戦争	姓名で判る男女結婚運	手相で判る運勢と壽命	起ち上つたアジアの回教徒	日本を狙ふユダヤ財閥の陰謀	印度獨立愈々近し	軍需景氣はサラリーマンにどう響	革新日本を動かす人々

藝文トッレフンパ

# 讀切講談

毎月一回日發行十錢

旅の無聊に!!

家庭の慰安に!!

讀んで面白く、見て爽快、連綿として興味つきないのが本書である。あの頃の、あの當時の、町人魂に接し、又あの頃、あの當時の武士精神に接し、心の糧とするには好適である。

此んな面白い本があつたのかと思はれる程、此の本は四季様々に姿を變へて諸賢にお目見へするのである。

聽くよりは先づ手にされん事を!!

全国各驛賣店で

發賣してあります。

七ノ一町槇・橋京・京東

社藝文トッレフンパ

八六一五二京東替振 〇五五九・橋京・話電